

ソーシャルワークの展開過程に

ICF を取り入れた考え方

磯美咲紀 内山裕加里 鈴木詩子

1. はじめに

私たちは、それぞれ障害者自立支援施設と特別養護老人ホームで社会福祉援助技術現場実習Ⅰ（以下、実習とする）を行った。

実習中の体験を振り返る中で、アセスメントの段階に共通課題があがった。そのため、アセスメントについて学びを深めたいと思い、文献や論文を調べていた。調べを進めていくと、黒澤貞夫氏の『ICF を取り入れた介護過程の展開』という文献を見つけた。この文献によると、ICF の考え方はアセスメントだけではなく、支援の過程全体において活用することができるかと理解した。

このことから、支援過程に ICF の考え方を取り入れることで効率よく情報が整理され、情報の関係性が明確化され、円滑に支援が展開できるのではないかと考え、このテーマについて研究をしていきたい。

2. 研究方法

- ①話し合いの上、研究テーマを設定する
- ②テーマに関する文献や論文を読み、情報の収集を行う
- ③実習での体験を集めた情報などと照らし合わせる
- ④実習担当教員と面談を行う
- ⑤これまでの話し合いを文献照らし合わせながら考察をまとめる
- ⑥ソーシャルワーカーとしての今後の課題を明確にする
- ⑦報告会で研究の発表を行う

3. 先行研究

(1) ソーシャルワークの展開過程

インタビュー→事前評価(アセスメント)→プランニング→支援の実施→モニタリング→終結

引用： 社会福祉士養成講座『相談援助の理論と方法 I』 中央法規 2017年

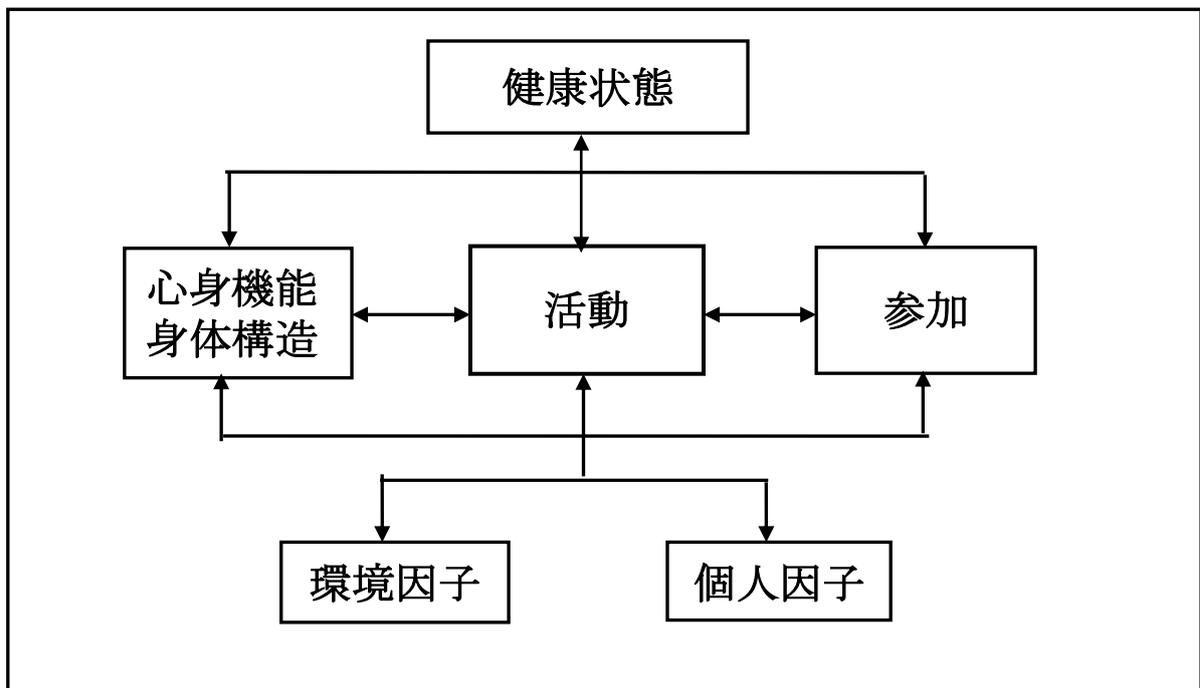
(2) ICFとは

① ICFの考え方

ICFとは、疾病を起点とした「医学モデル」と併せて、個人のもつ歴史や属性、社会的関係や物的環境なども個人が生きていくうえでの能力の発揮や社会的不利に関連しているとする。「社会モデル」を障害の概念として含む「医学モデルと社会モデルの統合モデル」である。さらにICFはそれぞれの視点におけるマイナス面だけでなく、プラス面にも着目する。

引用： 黒澤貞夫 『ICFをとり入れた介護過程の展開』 建帛社 2017年

② ICFの整理チャート



引用： 黒澤貞夫 『ICFをとり入れた介護過程の展開』 建帛社 2017年

③ ICF 構成要素の定義

健康状態	: 利用者の抱えている病気や怪我、変調を意味する。
心身機能・身体構造	: 心身機能とは、身体系の生理的機能（心理的機能を含む）であり、身体構造とは器官・肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分である。
活動	: 課題や行為の個人による遂行のことである。
参加	: 生活・人生場面へのかかわりのことである。
背景因子	個人因子 : 個人の人生や生活の特別な背景であり、健康状態や健康状況以外のその人の特徴からなる因子である。
	環境因子 : 人々が生活し、人生をおくっている物的な環境や社会的環境、人びとの社会的な態度による環境を構成する因子である。

引用 : 諏訪さゆり 大瀧清作『ケアプランに活かす「ICFの視点」』日総研 2005年

上記で述べた背景因子には、**促進因子**と**阻害因子**という因子が存在する。

促進因子 : ある人の環境において、それが存在しないこと、あるいは存在することにより、生活機能が改善し、障害が軽減されるような因子をいう。

阻害因子 : ある人の環境において、それが存在しないこと、あるいは存在することにより、生活機能が制限され、障害を生み出すような因子をいう。

個人因子と**環境因子**の位置づけ

個人因子と環境因子の基本的理解はアセスメントにおいて行われる。アセスメントに基づいた実施において、その因子がどのように変化し、「活動・参加」に影響を与えているかについては、実施から評価の段階でみることができる。個人因子と環境因子に位置づけは、基本的にアセスメントから出発して、2段階に分けて考えることができる。

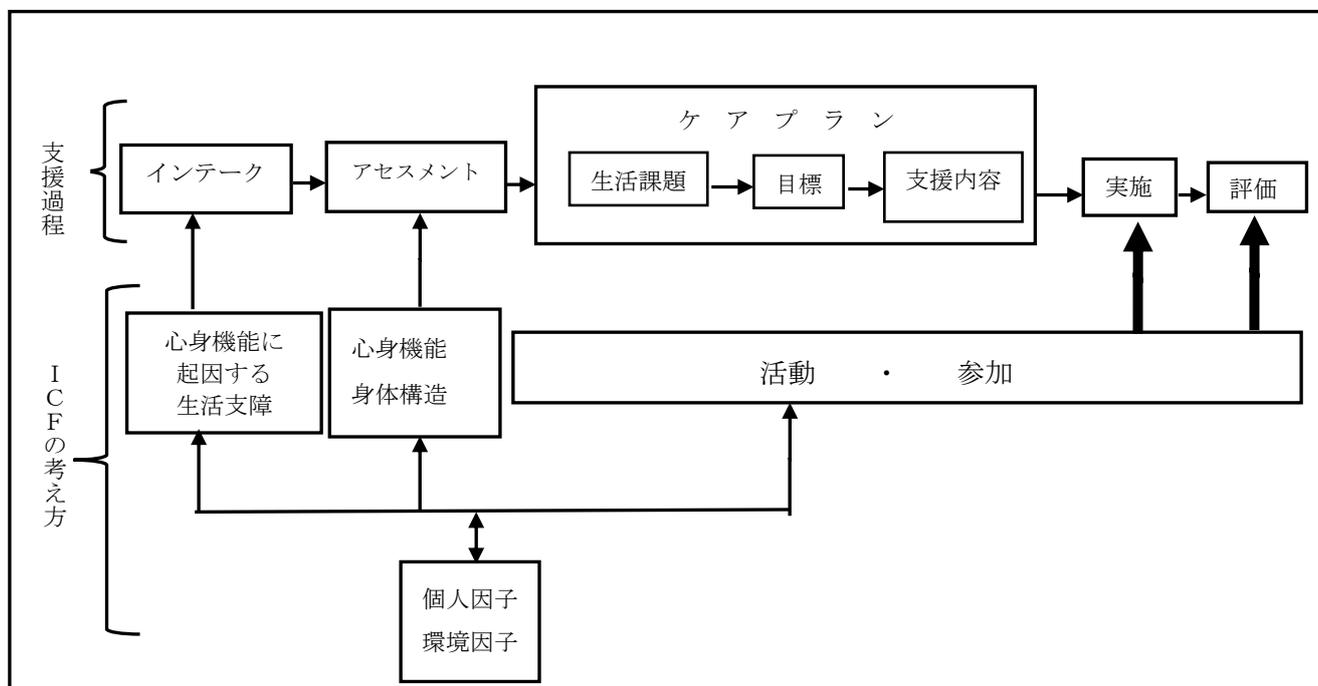
引用 : 黒澤貞夫 『ICFをとり入れた介護過程の展開』 建帛社 2017年

展開過程における個人因子と環境因子

段階		問題とする事柄	個人因子と環境因子 (阻害因子・促進因子)
第1段階	相談・面接 アセスメント プランニング	これからどのようにして生活課題を解決していこうとするのかという状況の理解と、今後の方向性の問題	アセスメントの対象となる個人因子と環境因子を計画においてどのように活かして使うか。目標は因子の変化の可能性。
第2段階	実施 モニタリング 評価	実施の結果の見守りから評価へ。状況と、結果はどうであるかという問題	実施によって各因子がどう変化してきたのか、因子の統合化の過程をみる

引用： 黒澤貞夫 『ICF をとり入れた介護過程の展開』 建帛社 2017年

【図1】 ICF を取り入れた支援過程



参考： 黒澤貞夫 『ICF をとり入れた介護過程の展開』 建帛社 2017年

4. 先行研究の考察

私たちは、以上の先行研究からソーシャルワーカーがソーシャルワークの展開過程において ICF の考え方を取り入れることができると考えた。そして、ICF の視点をインテークの段階から取り入れることにより効率よく情報が整理され、情報の関係性が明確化されるのではないかと考えた。そのため、黒澤貞夫氏が作成した介護過程における ICF の考え方 [図 1] を支援過程に置き換える。そして、インテーク、アセスメント、ケアプラン、モニタリング、評価の各段階でどの利用者の情報に重点を置いていくのかも同時に仮事例で明らかにしていきたい。

5. 仮事例

【設定】

(1) 登場人物：利用者 A さん 80 歳 男性 (以下、A さんとする)

要介護度 4、脳梗塞後遺症による左片麻痺、車椅子を利用、
糖尿病

ソーシャルワーカー B さん 特別養護老人ホームのソーシャルワーカー
(以下、B さんとする)

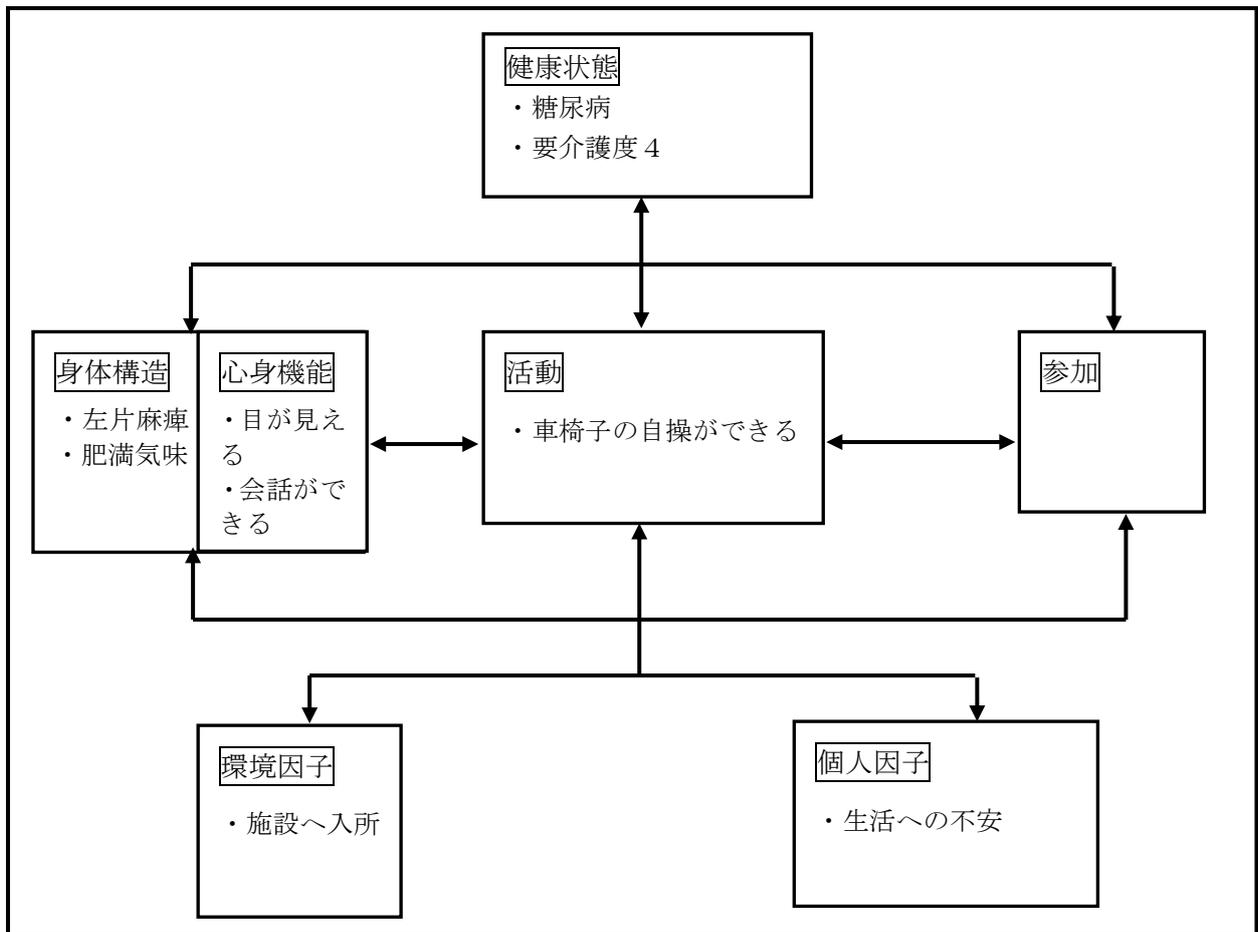
(2) 入所に至るまでの経緯

A さんは脳梗塞発症前、趣味である将棋や日常の日課であった散歩を行っていた。家族構成は妻と娘であるが、娘は結婚を機に家を出て、遠方で暮らしている。したがって、A さんと妻は二人暮らしをしていた。その後、A さんは脳梗塞を発症し、左に麻痺が残り、介護が必要な状態となった。A さんは特別養護老人ホームに入所することには消極的であったが、妻が 1 人で在宅介護を行うことが難しくなり、入所が決定した。

【場面1】 インテーク

Bさんは、特別養護老人ホームに入所することが決定したAさんとAさんの家族と初回面接を行った。BさんはAさんに今後の生活への意向を聞いた。そこでAさんは「施設での生活が不安。施設に対していいイメージがない。」という気持ちを語った。Aさんは施設で暮らしていくことに不安を持ち、暗い表情をしていた。[図2]

[図2]

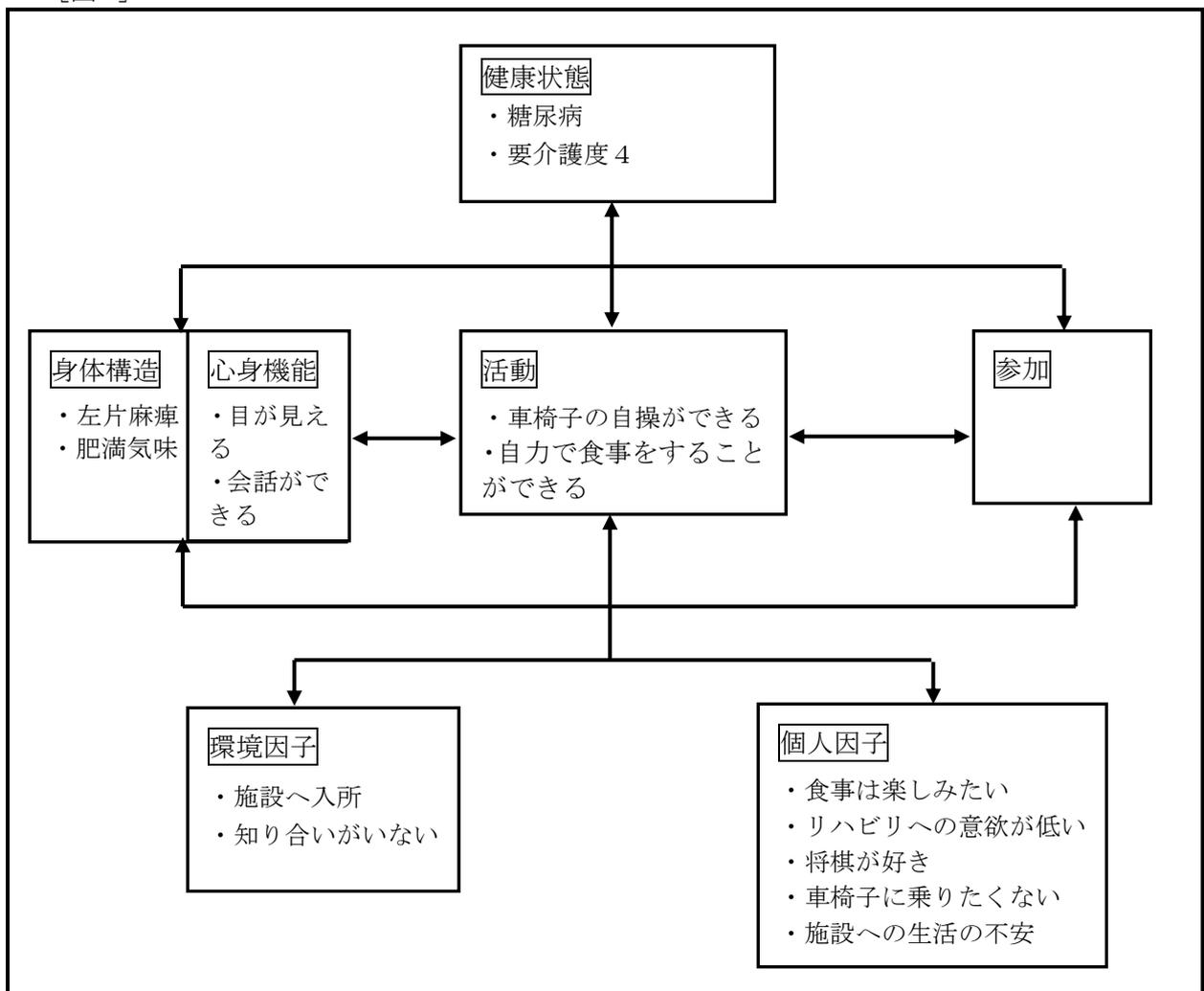


【場面1】においては、心身機能に起因する生活支障に重点を置く。客観的にわかる情報とAさんが話した気持ちを ICF の表 [図2] に記入した。Aさんの施設に対する不安などが語られたが、インテークの段階では得られる情報が不十分で、Aさんの環境因子や個人因子といった背景因子もまだ詳しく明らかにされていない。

【場面2】 アセスメント～ケアプラン

次にBさんは、Aさんの心身機能や身体構造、健康状態などの情報を収集し、アセスメントシートに記入した。そしてそれらの情報を分析した結果、Aさんは、糖尿病でも食事は楽しみたいと考えていることや将棋が趣味であることがわかった。一方で、知り合いがいないことが施設での生活へ不安を抱く原因となっていることなどもわかった。さらに、“車椅子に乗るのは惨めなことだ”と考え、車椅子に乗ることを嫌がっている様子だった。生活の不安からものごとへの意欲が低く、リハビリを行うことに対しても消極的な反応を示した。

[図 3]



【場面2】においては、**健康状態** **心身機能** **身体構造**に重点を置く。情報収集で得た情報を以下の ICF の表に記入すると、心身機能の他、**背景因子**も見えてきた。さらにそれらの情報の分析によって、生活の支障となっている身体機能での阻害因子と、個人の心ありようとしての阻害因子が存在することがわかった。Bさんは、環境の整備などの適切なプランニングと支援の実施によって、**阻害因子**を**促進因子**に変えることができるのではと考えた。3つの**生活課題**を明らかにし、**長期目標**と**短期目標**、**支援内容**を設定して [図4] のようにした。

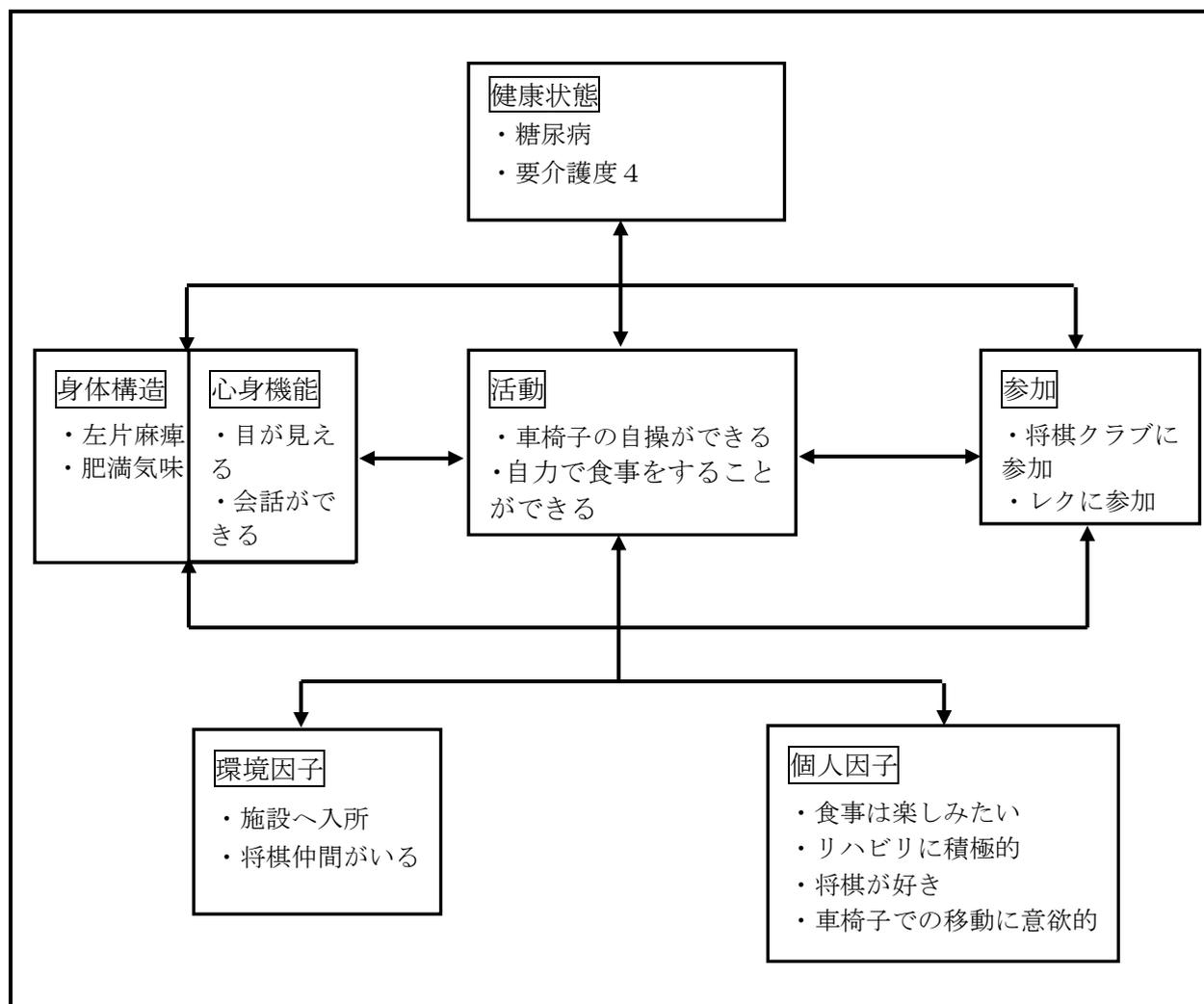
[図4]

生活課題	長期目標	短期目標	支援内容
施設での生活への不安を軽減したい	日常の楽しみを見つ けることができる	人との交流を増やす ことができる	施設の将棋クラブ に参加するよう声 かけする。
健康的な生活を送り たい	糖尿病の症状を改善 することができる	バランスのとれた食 事をすることができ る	本人の食事の嗜好 に合わせてバラン スのよい食事を提 供する
身体機能を維持・向 上したい	身体機能を維持・向 上することができる	体操やリハビリを継 続して行うことがで きる	体操やリハビリに 取り組みやすい環 境を整える

【場面3】支援の実施・モニタリング

【場面2】で考えたケアプランを実施し、Aさんへの支援が行われた。Aさんは将棋が趣味であることから、職員に勧められて将棋クラブへ参加することになった。そこで将棋を楽しむ仲間たちと出会い、クラブに積極的に参加したり、その仲間と普段の生活においても話したいという気持ちになった。生活において楽しみができたことからAさんの表情は生き生きとしてきて、これまで消極的だったリハビリにも積極的に取り組むようになった。そして、“惨めだ”と乗りたがらなかった車椅子をいわば“自分の足”と認識できるようになった。

(図 4)



【場面 3】においては、活動・参加に重点を置く。心身機能障害としての左片麻痺は活動と参加に対して不自由であるから、**阻害因子**である。さらにAさんは“車椅子に乗るのは惨めなことだ”という価値観を持っており、これも**阻害因子**となっていた。しかし将棋クラブを通じて仲間ができて、生活における楽しみを作ったことにより、ものごとへの意欲が高まりリハビリにも積極的になった。左片麻痺という生活支障の起因となる因子が変化したわけではないが、特別養護老人ホームという環境因子の中で、将棋クラブで将棋仲間ができたことやAさんの周囲の人々の働きかけにより、Aさんの個人因子である意識に変化が起こった。“車椅子に乗る”という事実が、仲間とのかかわりを経て“惨めな姿”という**阻害因子**から“車椅子に乗って頑張ろう”という**促進因子**へと変化した。

生活課題	長期目標	短期目標	支援内容
施設の中で交友関係を広げたい	施設での友人を増やすことができる	行事やレクに積極的に参加して楽しむことができる	・施設の将棋クラブへの参加を継続する ・他の行事やレクに参加できるように声かけをする
健康的な生活を送りたい	糖尿病の症状を改善することができる	バランスのとれた食事をするができる	本人の食事の嗜好に合わせてバランスのよい食事を提供する
日常生活において車椅子を用いて移動したい	身体機能を維持・向上することができる	体操やリハビリを継続して行うことができる	体操やリハビリに組みやすい環境を整える

6. 総合的な考察

私たちは、ICF の活用することで研究を進めてきた。仮事例を通し、各段階において利用者の情報のどこに焦点を置くのか、また利用者の背景因子が阻害因子から促進因子に変わる様子もわかった。これらのことから、[図1] を活用することにより、利用者の情報が整理されやすく、情報の関係性が明らかになった。

また、インテークやアセスメントの段階ではまだ暫定的にすぎなかった「活動・参加」の項目が支援の実施、評価をすることで明らかになってくることも仮事例を通して理解した。

将来、私たちがソーシャルワーカーとして働くときこれらの研究を活かしていきたい。そのために、利用者の支援をする際 ICF の考えを取り入れ、よりよい支援を提供できるソーシャルワーカーになりたいと考える。

7. おわりに

本日はお忙しい中、私たちの報告を聞いて下さりありがとうございました。私たちのグループでは、ICF について研究を進めてきましたが、はじめはなかなかテーマが決まらず、路頭に迷っていました。しかし、グループでの話し合いを根気強く行った結果、テーマを決めることができ、同時にメンバー間の仲を深めることができました。

今日の報告会までの日々は時に苦しく辛いものでした。ここまで来ることができたのは、実習を快く受け入れてくださった実習担当職員をはじめとする施設職員の皆様、私たちと関わってくださったご利用者の皆様のおかげです。心の底から感謝申し上げます。また、親身になって熱心にご指導してくださった実習担当教員の方々、実習に関する調整を下さった実習助手の方、お忙しい中アドバイスを下さった先輩方、実習報告会の準備をしてくれた後輩たち、夜遅く帰ってもご飯を作って待ってくれた家族、そして、この1年間切磋琢磨し合った仲間たち。たくさんの方々が私たちを支えて下さりました。本当にありがとうございました。

8. 参考文献

- ・黒澤貞夫『ICF をとり入れた介護過程の展開』建帛社 2017 年
- ・社会福祉士養成講座『相談援助の理論と方法 I』中央法規 2017 年
- ・諏訪さゆり 大瀧清作『ケアプランに活かす「ICF の視点」』日総研 2005 年